

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 高見 茂 研究科長・学部長 ②

名誉教授から 子安 増生 ③
松木 邦裕

研究ノート ④

教員から JEREMY RAPPLEYE 臨床教育学講座 准教授
院生から 雨宮 沙織 教育学講座 博士後期課程3年
社会人院生から 上田 勝久 臨床実践指導学講座 博士後期課程2年
留学生から 金 京和 比較教育政策学講座 博士後期課程2年

活動報告 ⑥

臨床教育実践研究センターから
岡野 憲一郎 臨床心理実践学講座教授 臨床教育実践研究センター長
教育実践コラボレーション・センターから
渡邊 洋子 生涯教育学講座 准教授
国際交流事業
齋藤 直子 臨床教育学講座 准教授

事務室から 眞継 芳春 事務長 ⑦

若手研究者出版助成事業 ⑧

諸記録 ⑩

1. おもな出来事(2015.12.1～2016.3.31)
2. ハラスメント防止に関する研修会
3. 入試結果(H28年度)
4. 学位授与件数(H27年度)
5. 教育職員免許状取得状況(H27年度)
6. 外部資金受入れ(H27年度)
7. 科学研究費補助金(H28年度)
8. 人事異動(2015.11.30～2016.6.1)

諸報 ⑭

新任教員・事務職員紹介
訃報



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

続特色入試考

教育学研究科長・学部長 高見 茂



本学部は、本年度入試より一般入試、理系入試、編入学入試、そして新たに特色入試を加え、4系統の入試により入学者を迎えることになりました。全学的に見ても、特色入試は京都大学に少なからぬ影響を与えたようです。特色入試受験者および合格者に占める女子比率は一般入試より高く、また受験者・合格者とも広く全国に広がり、従来受験者の無かった高校からも志願者がありました。従来型の教科目に関する学力に加えて、学力では測れない能力・適性を見極めて優れた入学者を獲得するというねらいの下に打ち出された新機軸です。この成否は、一に特色入試による入学者の今後の成長・発展に懸っているといえます。

さて本学の今回の特色入試は、現代社会の組織改革とも深く繋がる要素を持っていると思われます。目下政府は、女性の社会進出、管理職に占める女性比率の向上といった女性の登用の拡大を重点政策として推進しています。これは未活用の労働力確保という量的課題に加えて、組織パフォーマンスの向上という質的課題に応え得る戦略であるとも読み解けます。このことは自ずと組織の多様性向上とも深く関わる問題であり、その多様性の内実をきちんと吟味することが必要となります。

入山章栄早稲田大学ビジネススクール准教授は、その著「ビジネススクールでは学べない世界最先端の経営学」の中で、「タスク型の人材多様性」と「デモグラフィー型の人材多様性」を区別すべきだと主張しています。タスク型とは「その組織のメンバーがいかに多様な教育バックグラウンド、多様な職歴、多様な経験をもっているか」を指し、デモグラフィー型は性別、国籍、年齢などその人の「目に見える属性」の多様性を意味するとしています。経営学の最先端の研究では、組織の成果向上に効果があるのはタスク型の多様性であり、デモグラフィー型は効果がないか、あるいはマイナスになることすらあると指摘しています（日本経済新聞2016年1月16日付朝刊）。

これを敷衍すれば、組織内で女性や外国人の登用を進めても、組織パフォーマンスにとっては、逆効果になりかねないということになります。目下の政府主導の政策は、あらゆる組織で女性、外国人の登用に重点が置かれ、ともすれば

それで社会課題が解決されると捉える向きもあるようですが、入山准教授の説によると事はそう簡単ではなさそうです。「デモグラフィー型の多様性」が組織効率向上の阻害要因となる原因は、女性なら女性が一気に固まってしまうこと、つまりデモグラフィー（人口統計学）によって区分された属性が閉じた組織になり、それぞれが孤立し他の組織との情報交換等の交流がないことにあると指摘できるのです。

こうした事実は、経営組織論の研究結果によっても明かに説明されるようです。すなわち近年の経営組織論の研究者は、組織パフォーマンスの質の規定要因として、人的資本（Human Capital）に加えて、人々の相互関係性つまり社会関係資本（Social Capital）に注目する傾向が見られます。社会関係資本は、人間の協力関係を促進し社会を効果的・効率的に機能させる社会ネットワークで、それはi)結束型（bonding）とii)橋渡し型（bridging）に大別されるようです。前者のネットワークは、閉鎖的・同質的で個別的な人間関係の信頼の上に成り立ち、いわば一昔前のムラ社会のイメージが良く当てはまります。後者のネットワークは、特定の組織枠組を越えてオープンで多様な信頼関係の上に成り立つことから、多様な情報交換が可能となり、イノベーションが生まれ易くなるとされています。

特色入試のねらいの一つに、入学者の多様性の促進ということが含まれていたと思われますが、入試タイプごとの結束型のネットワークの形成を抑制し、オープンな橋渡し型ネットワークが入学者の間で形成されるよう、私たちも見守る必要があるのではないのでしょうか。

40億年後、われらの天の川銀河（Milky Way）と隣接するアンドロメダ銀河（Andromeda Galaxy）とが衝突・合体し、20億年かけて新しい銀河（ミルコメダ：Milkomeda）が形成されると言われています。宇宙物理学は、銀河の合体は星間物質に変化を起こし新しい星を誕生させると説いています。異質なものの出会いから新しいものが生まれるという原理は、人間関係のみならず万物に共通する節理なのでしょう。

新たな出会いが、新入生の皆さんの人生にとって貴重な糧となることを祈って止みません。



子安 増生

新たな人生のスタート

本年3月をもちまして28年間勤務した教育学研究科を定年退職し、4月に甲南大学文学部人間科学科の特任教授に着任いたしました。在任中は、教職員の皆様方に変にお世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

研究科長・学部長として任期を終えましたので、3月は大変ハードな時期を過ごしました。大学院の学位授与式と卒業式が終わった直後の25日に、デザイン学シンポジウムとの連携で最終講義「心のデザイン：発達心理学的アプローチ」を百周年時計台記念館大ホールで開催させていただきました。幸い当日は天候にも恵まれ、大勢の方にご来聴いただくことができ、有り難くまた嬉しく存じています。

最終年度に自身が編集に関わる本を5冊も抱えたのも忙しい原因でした。うち3冊は3月に刊行、1冊は4月に刊行、もう1冊の英文書籍は6月までに刊行予定です。そのうち『教育認知心理学の展望』（ナカニシヤ出版）は、教育認知心理学講座の教員と出身者だけで執筆した標準テキ

ストであり、講座だけでなく研究科にもよい置き土産になったのではないかと存じています。

最終講義の翌週に、4日ばかり（梱包－搬出－搬入－開梱）で研究室の移転を行いました。新しい研究室に書籍や雑誌が入りきるか、相当以前から心配していましたが、何とか無事に収まりました。とはいえ、引っ越し業者さんに大まかに配架してもらっただけなので、大学に行くたびに少しずつ位置を整理し直しています。

甲南大学の特任教授は、教授会や委員会への出席義務はなく、3日間で3科目の講義と1科目の学部ゼミと月1～2回の大学院合同ゼミ、ならびに学科会議の出席をこなすのが仕事です。新しい講義科目の準備に追われていますが、時間的には随分楽になりました。神戸という新しい土地で新しい人生が始まり、今は見るもの聞くものすべてが新鮮です。

末筆ですが、研究科の皆様方のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。



松木 邦裕

新しい道、続く道

2016年度の4月は早くも過ぎてしまいましたが、教育学研究科教員、事務職員の皆様は研究科科長高見茂先生のリーダーシップの下、総力を挙げて研究科の発展にご尽力をいただいていることと拝察いたします。

お蔭様をもちまして、2016年3月末に退職に至り、4月5日には山極総長より名誉教授称号をいただきました。これもひとえに教育学研究科教員、事務職員の皆様の御高配の賜物と厚くお礼申し上げます。今後は我が国の精神分析の発展と国際的寄与に向けて、この称号に恥じない貢献を果たしたいと思っております。また、同窓会の皆様にはお仲間入りを御許しいただきたくお願い申し上げます。

この機会に、退職後の私の生活から近況を2,3紹介させていただきます。私はももとの居住地でありました福岡市に居を移し、精神分析の臨床と研究、啓発を中心とした生活を営み始めました。月曜日から土曜日までは精神分析臨床、そして週末は全国各地での研究会の講師等で過ごす日々です。しかし、ふとしたときに吉田キャンパスや京阪電車出町柳駅から京大までの町並み等が私の中に視覚像として鮮明に浮かび上がり、未だ私の感覚では京都での生活が続いております。

皆様ご存知のように、4月中旬から熊本を中心に大きな地震が発生しました。幸い福岡市は震災には至らず変わらぬ日常を続けることができております。最初大きな地震は4月14日で私が福岡に戻りまして2週間経ったときです。午後9時40分過ぎ、私は精神分析セッションの中でしたが、大きな揺れが来ました。福岡は殆ど地震がないところなので内心驚きました。その後、深夜にも大きなかつ長い揺れがあり、翌日は九州内の交通機関は完全麻痺でした。しかし、京大を始めとして全国の皆様の暖かい支援があり、被災地熊本の復旧は進みつつあります。震災前を越えた発展を期待したいものです。

最後に紙面をお借りし、感謝の思いを在職中にいただきましたご厚意にこころよりお礼申し上げますとともに、九州の地から京都大学大学院教育学研究科の皆様のご健康とご発展を祈念いたします。



研究科会議 昼食(送別)会

教員から

臨床教育学講座
准教授

JEREMY RAPPLEYE



Searching for a New Educational Paradigm

'Modern education' is an outgrowth of Western culture, originating in the specific cultural conditions of the Western world (Greek and Judaic thought) and then actively spread through global conquest and consumption (colonization and industrialization). This modern paradigm arose at a time when Western ambitions were universalist (a borderless religious polity under a transcendent God) and physical resources were deemed to be infinite. Although evolving and adapting over the past 500 years to myriad social, economic, and technological transformations, the basic cultural grammar of modern (Western) education has remained largely unchanged right up to the present.

Today, however, with the 'death' of the transcendent God (as announced by post-modernism) and with an acute awareness of the finite-ness of global resources (i.e., exponential population growth, resource depletion, climate change), the modern educational paradigm – and modern society more broadly – will inevitably face increasing critique in coming decades. As it does, where will we search for 'alternatives'? After five centuries of entrenchment of the modern paradigm worldwide, are there still alternative approaches left? If not, what hope can there be to overcome the presumptions embedded in the current paradigm without the presence of a philosophical-cum-educational Other?

Up until the late 1980s, there was a lively discussion among leading social scientists centered on the idea of 'Axial Civilizations', an idea that originated with existential philosopher Karl Jaspers. The key Western names in this discussion were

historical sociologists Shmuel Eisenstadt, Robert Bellah, and Eric Voegelin. Eisenstadt wrote a monumental work entitled *Japanese Civilization: A Comparative View* (1995) that argued that Japan was distinct from the West in being 'Non-Axial', i.e. it had not achieved a transcendental breakthrough but instead found alternative ways to order society without reference to a universalistic God. What is so striking about his conclusion is that it largely parallels insights offered by a distinct group of Japanese philosophers – the Kyoto School. Motomori Kimura's *Pedagogical Plan* (1946) and Akira Mori's *Educational Anthropology: Education as human becoming* (1978/1961) translated the work of the Kyoto School into educational philosophy and theory. Might this body of work represent the Other necessary for the emergence of a new paradigm?

Yet, the point is not that we can or should look upon hitherto muted Japanese traditions of philosophy, social theory, and educational thought as the new paradigm. Instead, it is that we must recognize the potential that this 'Other' tradition – one still virtually invisible to the wider World – holds for fundamentally rethinking the underpinning assumptions of the modern (Western) paradigm. What we need is rigorous research that works both theoretically and empirically to demonstrate the alternative ways of being and education that are disclosed through such works, as well as the an international dialogue that works to mutually define and refine a new paradigm. Only then will the search for a new educational model transform practice, even as it changes individual consciousness itself.

院生から

教育学講座
博士後期課程3年
雨宮 沙織



言語学習と人間の可能性

私は教育学講座の教育哲学研究室に所属しています。学部までは文学部の哲学科に在籍していましたが、「教育」というテーマを哲学的に探究したいという思いから、修士課程より本研究科に入学し、現在の研究室にお世話になっています。

修士課程では、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの思想に関する分析を進めてきました。遠いドイツの、現代とは異なる時代に思いを馳せ、そこから何が見出されるのか、考えてきました。研究を進めていく上で気になってきたのは、フンボルトの言語に対する観点です。私自身、国語の教職免許を有し、現在も通信制高校の教壇に立っていることから、言語を中心に据える教育思想に対して、関心を持ったのだと思います。

フンボルトはあらゆる言語に通じ、その生涯を言語研究に費やしたことで有名ですが、彼の言語思想は、教育論とも綿密に絡み合っています。「ギリシア語を学ぶことは、学者が機の作り方を学ぶのに劣らず、家具職人にとって役立つことだろう」という彼の言葉には、彼

が人間性の涵養と言語の学習とをいかに強く結びつけて考えていたかが、端的に示されています。彼にとって言語を学ぶことは、単なる言語技術の習得以上の意味を持っていたといえます。現在は、そのようなフンボルトの言語学習論を軸に、人間の能力や可能性について、より深く探究していきたいと考えています。

教育とは、まだ現実になっていない能力や可能性の状態を見極め、その可能性をひらいていく作業だといえます。もちろん教育のあり方や、そこで扱われる能力といったものは、時代や社会などの環境によって左右されます。しかし、その能力が「ある」ことを信じ、「ある」として現実を動かしていく知恵を、我々は歴史的に形作ってきたように思います。そのような知恵を掘り起こし、今ある教育の議論とつなげていくことが、これからの私の課題です。

社会人院生 から

臨床実践指導学講座
博士後期課程2年

上田 勝久



二足の草鞋の利点

京都大学に入り、早1年が過ぎました。この間に周囲からはしばしば「学生もして、仕事もして大変ですね」というようなことをいわれてきました。その場では劳いの言葉として素直に受けとっておきますし、実際、外で仕事をしつつ、授業用資料や紀要論文の作成、博士論文のための研究を進めていくことはたしかに大変ではあります。ただ、この二足の草鞋は精神健康的には案外良いものです。

私は臨床心理士として患者に心理療法を提供し、一方で専門学校や大学等で非常勤講師をしながら生計を立てています。外では一応「先生」と呼ばれながら、他方、京都大学では「生徒」として生きています。普段は患者や他職種のスタッフに一応頼りにされながらも、大学では私の方が先生方を当てにし、依存し、甘えています。私はこうした立場や役割の二重性をとても面白く感じています。というよりも、人間はひとつの立場や役割しか生きられない状況下に長くおかれると「人生の窒息感」のようなものに見舞われるのではないかとさえ感じています。大人が習い事をわざわざしようとするのも、仕事と習い事とい

う二重生活を創りだすことで、一重の人生に閉じこめられそうな窒息感から自らを救出しようとする試みとして理解することもできそうです。

さらに外では「先生」、大学では「生徒」になることで、より深く実感したことがあります。それは何かといいますと、職場では私は心理療法や授業のなかで患者や生徒に「当てにされて」いるわけですが、同時に私もまた彼らが支払う心理療法の代金や授業料を「当てにして」生きているという事実です。私は患者や生徒たちの「親」という側面を生きると同時に、彼らに養ってもらっている「子ども」でもあるわけです。社会人としての私もすでに二重性を生きているわけです。「先生」と「生徒」は互いに互いの生を保存し、創造し、成立させ合っているといえるのかもしれない。

このように授業の内容だけでなく、社会人と学生という二足の草鞋を履くことそれ自体からも様々な学びがあります。本当に貴重な機会を味わっている最中です。

留学生から

比較教育政策学講座
博士後期課程2年

全 京和



有意義な比較による「違い」の理解から共存へ

教育の世界と出会ったのは、東京で学部時代を過ごし、韓国に戻り成人教育機関で働き始めてからでした。仕事柄、大学生や社会人と接することが多かったのですが、国や会社の学習支援策が彼らの学習計画に大きく影響していたことから、現場に活かされる教育政策について考えるようになりました。教育政策は経済や社会政策とも深い関連性を持つため、それだけを切り離して考えることには限界があり、また教育を学際的視点から捉えることが必要だと考えています。この点において、本学研究科は、学校教育に限らず教育を一生の学びとして幅広く捉え、その研究の対象も他の学問の世界に開かれた講座構成になっていたため、本学への進学を決めました。

修士課程から継続して興味を持っているのは、政策形成のプロセスについてです。博士課程に進学してからは特に、政策形成における意思決定に着目し、大学を事例にその内部組織の構成と意思決定プロセスとの関連について、韓国の大学ガバナンス体制に注目しな

がら研究しています。ある組織の固有性が意思決定プロセスにどう現れているのかを考えるうえで、大学の内部構成員でもある大学院生としての日々の体験は考察の判断材料となる貴重なものです。

私たちは常に、何かと何かを比べてしまいがちです。私の場合、東京で経験した日本と今京都で経験している日本を、韓国での生活と日本での生活を、直接的に二つを比べずとも、思考する上で今までの経験に照らし合わせて新しい経験の位置づけを常におこなっています。その比較が上下関係や優劣を決めるためではなく、違いを意識しその背景の理解へつながるように、韓国と日本での経験からオリジナルな視点を作り出すこと、その目で韓国社会を再解釈し、日本社会に別の視点を提示すること、その外国人研究者としての可能性を信じて新たな経験を積んでいきたいです。

附属臨床教育実践研究センターから

平成28年度の活動予定

臨床心理実践学講座教授 臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎



当センターは、一般市民に開かれた心理臨床実践としての心理教育相談室(室長皆藤章教授)での大学院生や教官による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊等、教育・実践・研究活動を進めています。今年は3月に元センター長の松木邦裕先生が退官され、残されたメンバーで力を合わせてより一層の活動をと考えております。

昨年のリカレント教育講座(第19回)は2015年8月10日に開催され、「心の教育」を考える一いじめへの対応と心のケア」がテーマでし

た。今年のリカレント教育講座(第20回)は8月21日(日)に開催が予定され、「『心の教育』を考える—発達障害の理解と対応」をテーマとして現在準備を進めています。また公開講座は今年の10月2日に、ジャン・アブラム先生をお迎えして、「母子関係と創造性—ウィニコット理論から『受胎告知』を理解する」を開催いたします。

また東日本大震災被災者への支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し積極的な支援活動を行っています。2015年11月にも「恐竜の卵を取りかえせ!&和(わ)・話(わ)・輪(わ)の会」を院生スタッフ主導のもとに開催し、また2016年3月には「舟を作ろう&砂マンダラ体験」を開催しました。継続して参加されている方や新規の方など、毎回6~7世帯の家族が参加されています。震災から5年が経過し、避難されてきている方々の状況や困難はますます個別化してきております。また今回あらたに熊本地震が起き、支援室の活動も新たな局面を迎えており、今後もこのような活動を継続していく必要性を感じております。

教育実践コラボレーション・センターから

地域からの学び・異業種専門職同士の学び —「京都の地域リソース実践学」とIPE

生涯教育学講座 准教授 渡邊 洋子



いわゆる「学校」とは異なる新たな教育交流空間の可能性を探る試みとして、2014年度から「京都の地域リソース実践学」とIPE(多職種連携/異業種交流)の実践に取り組んでいます。

前者はCOC(地(知)の拠点事業)の一環で、森林が93%を占め過疎化が進む京北地域(現京都市右京区)をフィールドに、学生・院生が地域の自然、農林業、伝統文化、まちづくり活動などに触れ、地域の魅力を発見し、地域住民に学びながら、地域課題への学生なりのアプローチを目指します。あうる京北(府立ゼミナールハウス)での宿泊研修とフィールドワーク、グループ活動に加え、授業の成果を地域に報告する機会を設けています。2015年11月には同地の北桑田高校と高大連携ワークショップを行い、高校生・大学生と一緒に「ふるさとの未来」を考えました。今年度も総合学習と連動した第二弾を準備中です。

後者のIPE(Interprofessional Education)では、近年チーム医療などで一般化した仕事直結型IPEに対し、専門職/専門職教育の縦割り構造をこえる一つの手だてとして、交流型IPEのプログラム開発に取り組んでいます。薬剤師、海上保安官、保育士、医師の養成に携わる異業

種メンバーで、2015年10月に公開ワークショップ「InterProfessionalからプロフェッショナルリズムを考える—木に関わる専門職の協業を手がかりに—」を企画・運営しました。午前中は話題提供(林業従事者、建築士、工務店経営者)、午後は、消防士、弁護士、薬剤師、学芸員、公認会計士、編集者、助産師などの参加者によるグループ・全体討論を行い、予想をはるかに超えた盛り上がりとなりました。

いずれも実践研究のため、当日の成否もさることながら、事後の振り返りこそが重要な意味をもちます。地域の多様な人々や「互いに違う」専門職との出会いは刺激的で示唆にあふれ、フィールドや交流の中での人の育ちや変容に、新たな視野を拓いてくれるコラボレーションです。



教育学研究科とUCL教育研究所との国際交流

臨床教育学講座 准教授 齋藤直子



教育学研究科(以下「京大」)では、2015年12月11日(金)–13日(日)ロンドンのUCL教育研究所(以下IoE)において「国際教育研究フロンティアC」と同研究所博士課程コースの科目との合同授業“The Cultivation of Political Emotions”(「政治的感情の育成」)を開催した。講師は、UCL教育研究所の教育哲学部門長であり哲学センター長であるPaul Standish教授であった。参加者は、京大より8名、IoEより9名、参加者の国籍は、日本、イギリス、中国、台湾、韓国、アメリカ、アイルランド、キプロスなどきわめて国際的な構成であった。参加した教員、学生の研究領域は、教育哲学、市民性教育、生涯教育、教育政策学、比較教育学など多岐にわたった。京大学生は、3月9日(水)にIoEでのイギリス教育哲学会ロンドン支部のセミナーに参加する機会を得たり、同セミナーの後大学のパブでの議論に参加したりと、教室を超えた学際的・国際的



的交流の場を経験することができた。今回初めて海外の授業を経験したTAの松枝拓生氏(臨床教育学講座博士課程)よりは、Standish教

授の指導のもとで国際性、学際性、実践性を備えた生きた学問としての教育研究のあり方を京大学生が教えられたこと、「国際化は他文化との出会いに至るところで誘発し、自己にとってなじみ深い思考様式の中に閉じこめることを許さない」との報告がなされた。授業の成果は帰国後、国際会議での英語発表や論文投稿につながられている。昨年に続き、ロンドンでの授業の様子が京都大学OCWを通じて世界的に発信されている。<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/en/graduate-school-of-education/02>

本イベントは過去数年間にわたり京都とロンドンで行われてきた京大とIoEとの国際交流の発展的成果である。第三期中期目標・計画で示されているように、現在、京大の国際的な位置づけを世界で向上させるために大学をあげて内側からの国際化、制度的な改変や国際プロジェクトの推進、国際交流に関する意識変革が奨励されている。その推進の原動力は学生の高度な語学力の育成と内向き志向の打破にある。外国の大学との合同授業は、京大が推進する教育研究国際化戦略の一端を担うものでもあり、今後、京大の教員と外国の大学の教員による共同指導など、教育学研究科の国際化に向けての新たな教育研究の取り組みの布石を打つものとなるであろう。

事務室から

春に想う

事務長 眞継 芳春



4月1日付けで本研究科事務長に就任いたしました眞継芳春と申します。

昭和56年6月に犬山市にある霊長類研究所で京都大学の教育・研究に関わる業務に携わって今回13部署目となりました。約8年経った頃に昭和から平成に変わり、そこから16年後に国立大学法人となるなど大きな変化に立ち会うことは、その当時は大変という想いででしたが、今となれば歩んで着た道を振り返ればやや懐かしさを感じる時があります。

国立大学法人となった平成16年4月の春は教育学研究科の総務掛で勤務いたしておりました。その当時、今、居る部屋で勤務しておられ退職されました大先輩の事務長さんが本年3月初旬に御逝去されました。亡くなられる数日前に私の息子の結婚のお祝いの品とともに一通のお手紙が添えられ我が家に届きました。そのお手紙には、「人は、生まれてきたことに感謝し、育ててもらったことに感謝し、友・伴侶を得たこ

とに感謝し、人を育てられることに感謝し」とだけ記してありました。私の息子へのメッセージであるとともに、私へのメッセージでもあると思いました。その10日後に4月1日付けで教育学研究科での勤務の異動内示を受け、大変驚きました。

本学も本年度より第3期間に入り、ミッションの再定義、国際化、少子化や入学者の多様性などさまざまな事柄への対応が時代や社会の動向により求められています。先生方も教育、研究等に係る様々な取り組みへの対応に奔走され、非常に多忙な状況であることを感じております。

昨今、さまざまなツールが急速に進歩している状況ですが、それを使うのも“人”であることを忘れず、会話と優しさと前向きな気持ちをもって事務室一同、高見研究科長はじめ先生方とともに、教育学研究科の発展に尽くしていきたく思います。

数年後に良き春を想えるように。

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。
本制度を利用して昨年度は7件採択されましたので、ご紹介します。

氏 名	修了年月日・現職	タ イ ト ル	出版社
福井 佑介	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成27年3月修了 京都大学大学院教育学研究科 講師	図書館の倫理的価値「知る自由」の 歴史的展開	松籟社
猪原 敬介	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成24年3月修了 日本学術振興会 特別研究員 PD	読書と言語能力 —言葉の「用法」がもたらす学習効果—	京都大学学術出版会
白戸 健一郎	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成26年3月修了 筑波大学人文社会系 助教	満洲電信電話株式会社 —そのメディア史的研究—	創元社
奥村 好美	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成27年3月修了 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 講師	〈教育の自由〉と学校評価 —現代オランダの模索—	京都大学学術出版会
古見 文一	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成27年3月修了 日本学術振興会特別研究員PD	ロールプレイを通じて高める他者理解 —マインドリーディングの心理学—	ナカニシヤ出版
本所 恵	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成23年9月修了 金沢大学人間社会研究域 准教授	スウェーデンにおける高校の教育課程改革 —専門性に結び付いた共通性の模索—	新評論
堀川 聡司	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成27年3月修了 目白大学心理カウンセリングセンター 助教	精神分析と昇華 —天才論から喪の作業へ—	岩崎学術出版社



『図書館の倫理的価値「知る自由」の歴史的展開』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成27年3月修了 京都大学大学院教育学研究科 講師

福井 佑介

1950年代から、図書館界は、利用者である国民に、情報に接近する権利を認め、それを保障することが図書館の目的であると位置付けてきた。これを「図書館の自由に関する宣言」では、「知る自由」の保障と表現しており、図書館の在り方に大きな影響を及ぼす規範の中心に位置する。

本書では、この権利保障の思想が、1950年代から2000年代にかけて、歴史的にどのように展開してきたのかを検討した。いずれの時代にも、図書館界は、その時代に規定されながら権利保障の思想を展開していった。占領期直後の言論の自由への危機感から生じた「知る自由」の保障は、教育学の学習権や、法学の「知る権利」論を図書館の文脈に最適化する形で取り込んできたのである。助成をいただいで公刊した本書の成果が、これからの図書館の在り方を考える契機となることを願っている。



『読書と言語能力—言葉の「用法」がもたらす学習効果—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成24年3月修了 日本学術振興会 特別研究員 PD

猪原 敬介

読書は、ある人にとっては単なる情報収集であり、ある人にとっては生きがいである。前者の人にとって、読書という行為そのものは空気のようなものであり、後者の人にとっては、何か柔らかく、直接触れたくないようなものである。そして本書の著者であり、認知心理学と教育心理学を専門にする私にとっては、読書が「『言葉の用法』を大量に学べる貴重な学習機会であり、私たちの言語発達に極めて重要な働きをするもの」に見えた。

本書は、上記の「情報収集派」と「生きがい派」とは異なる視点で読書について論じたものである。科学的手法を重視し、多くの心理学調査・実験、そしてコンピュータ・シミュレーションの結果を掲載している。本書が読書についてのこれまでと違った捉え方を提供し、新しいアイデアや活動を生み出す一助となれば幸いである。



『満洲電信電話株式会社—そのメディア史的研究—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成26年3月修了 筑波大学人文社会系 助教

白戸 健一郎

本書は、満洲国において電信・電話・ラジオ放送事業を営んでいた組織・満洲電信電話株式会社のメディア事業の実態とその意義を研究したものです。そもそも、満洲電信電話株式会社は、日本や台湾や朝鮮の電気通信組織が電信電話事業を通信省(局)、ラジオ放送を放送協会が分担して運営していたのと異なり、一組織において運営するという独自性を持っていました。これを決定させた認識と論理は当時の時代状況に強く影響されています。また、満洲電信電話株式会社が創設された1930年代は電気通信技術が飛躍的に発展した時代でした。ラジオ放送は加速度的に普及し始め、東京と北京を結ぶ有線電話回線ができあがり、無線通信は軍はもちろん通信社や新聞社も積極的に利用しはじめます。これが持つ意義を明らかにしたのが本書です。



『〈教育の自由〉と学校評価—現代オランダの模索—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成27年3月修了 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 講師

奥村 好美

学校評価は何のために行うのでしょうか。どのようにすれば、学校評価が点検や査定へと矮小化されることなく、子どもたちに質の高い学力を保障し、教育実践への参加を促すために実施されるのでしょうか。拙著は、オランダを事例とすることで、こうした問いに対する解決の糸口を探っているものです。

オランダでは、憲法で「教育の自由」が保障されており、子どもたちの豊かな学びを実現しうる多彩な教育実践が数多く行われています。そのため、オランダの学校評価は、一定水準の教育の質を保証することに加え、いかにそうした多彩な教育実践を守りうるのかという問いをつきつけられているといえます。オランダの事例を通じて、拙著が学校評価の在り方を考えるための一助となりますことを願っております。

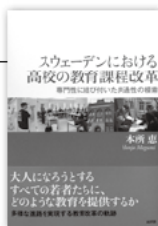


『ロールプレイを通じて高める他者理解—マインドリーディングの心理学—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成27年3月修了 日本学術振興会特別研究員PD

古見 文一

他者の心を理解することは簡単なことではありません。そして理解するだけではなく、それを用いて即座にコミュニケーションをするということは、実はとても難しいことです。本書は、筆者が平成27年度に提出した博士論文に若干の修正を加えたものです。その内容は小学生と成人を対象とした心理学実験を通して、他者の心の理解の難しさと、それを促進する「ロールプレイ」の効果を検討したものです。私たちは、ヒトの能力としては他者の心は理解できるにも関わらず、どうしても自己中心的に他者の心を捉えてしまう人間です。一方で、他者の役割を経験することにより他者の心を理解が深まっていきます。そのような人の姿が本書を通して少しでも多くの方に伝われば幸いです。



『スウェーデンにおける高校の教育課程改革—専門性に結び付いた共通性の模索—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成23年9月修了 金沢大学人間社会研究域 准教授

本所 恵

本書は、スウェーデンにおける1970年代以降の高校教育課程改革の軌跡をまとめたものです。その過程では、多様な専門教育を重視しながらすべての生徒に共通する教育をどのように設定するか、そして、様々な専門学科をどのようにして平等に位置づけるか、といった、日本でも共有される後期中等教育の課題が正面から扱われてきました。同国の高校は、複線型の学校制度をラディカルに単線化する改革によって単一の後期中等教育機関として誕生しており、そのため、以前にあった多様な職業教育や進路を保障しつつ共通の教育を行う必要があったためです。

半世紀にわたる改革を経てなお、理想と現実のはざまで議論は続き、高校教育の形は変化し続けています。スウェーデンの試行錯誤から、高校教育の可能性を考え直すきっかけになれば幸いです。



『精神分析と昇華—天才論から喪の作業へ—』

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成27年3月修了 目白大学心理カウンセリングセンター 助教

堀川 聡司

精神分析を創始したフロイトは、人にとって“性”がどれほど大きな存在であり、多くのこころの病の原因となっているかを訴えました。そして同時に、人の社会的・文化的な側面、さらには芸術的な創作にも性が大きく寄与していると考えました。彼はそういったこころの作用を「昇華」と名づけましたが、フロイト以後の精神分析の世界では、この概念について盛んに議論されることはあまりありませんでした(おそらく一般にはもっともよく知られた精神分析用語の一つでしょう)。

本書は、昇華という概念を歴代の精神分析家たちがどのように扱ってきたかを俯瞰し、臨床的な意義を模索したものです。昇華が如何に厄介で扱いづらい概念であるかを示す一方で、それが臨床実践を振り返る際、多くの視座を提供する可能性を主張しました。

諸記録

おもな出来事(2015.12.1～2016.3.31)

12月 11日(金)～13(日) 英国UCL教育研究所との合同授業

(ロンドンUCL教育研究所)

16日(水)～18(金) 国際会議「承認の諸問題とプラグマティズム・アメリカ超越主義

— 北欧—日本の交差と高等教育の実践的課題 —」

(University of Helsinki, Finland)

2月

19日(金) ソウル大学との研究交流会

(総合研究2号館)

20日(土) 教育実践コラボレーション・センター E. FORUM事務局主催

制野俊弘先生 講演会「命と向き合う教室 ～子どもが「命」に見える学校・学級づくり～」

(総合研究2号館)

21日(日) 教育実践コラボレーション・センター主催

生涯学習講演会「『学問』の世界への誘い」

(京都府相楽郡南山城村旧野殿童仙房小学校)

3月

6日(日) 臨床教育実践研究センター主催

こころの支援室「舟をつくろう&砂マンダラ体験」

(総合研究1号館)

21日(祝) 松木邦裕 教授 最終講義

「私説 精神分析入門」

(時計台記念ホール)

24日(木) Design Visions講演会

「ツーリズムにおけるブランドイメージ」

(総合研究2号館)

25日(金) 子安増生 教授 最終講義

「心のデザイン:発達心理学的アプローチ」

(時計台記念ホール)

26日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催

公開シンポジウム

『新しい学校のかたちを考える -学校を問い直す子どもたち-』

(芝蘭会館2階稲盛ホール)

27日(日) 教育実践コラボレーション・センター主催

公開シンポジウム

『新しい家族のかたちを考える -家族を問い直す子どもたち-』

(芝蘭会館2階稲盛ホール)

ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成27年度は、平成28年2月18日(木)に開催し、しぶや総合法律事務所弁護士 渋谷元宏氏による講演が第1会議室であり、教員、事務職員の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。



平成28年度入試結果

◎教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	45	144	142	47	57
	理系	10	39	36	10	
特色入試		6	25	25	5	5
第3年次編入学		10	26	25	9	9

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たなかったため、残余の募集人員を加えたもの。

◎教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18	39(7)	37(7)	24(5)	23(5)
		臨床教育学専攻	14	26	24	5	5
	教育科学専攻(専修コース)		10	26(1)	25	10	9
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	0	0	0	0
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)			4	15	15	5	4
博士後期課程編入学	教育科学専攻		若干名	7	7	4	4
	臨床教育学専攻			4	4	1	1

()内の数は外国人留学生で内数

平成27年度学位授与件数

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	71
修士	教育科学専攻	30
	臨床教育学専攻	15
博士	課程博士	17
	論文博士	0

平成27年度教育職員免許状取得状況

中学校専修免許状	0
中学校1種免許状	8
高等学校専修免許状	0
高等学校1種免許状	14
特別支援学校1種免許状	0

外部資金受入れ(H27年度)

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
先端研フロンティア講座 「こころの総合研究」	パナソニック株式会社	楠見 孝

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
『新・教職教養シリーズ2020(仮称)』 出版研究のため	協同出版株式会社	高見茂、田中耕治、 矢野智司 他
日本近世の「施印」に関する基礎研究 -国内・国外調査と事例研究	公益財団法人 DNP文化振興財団	ファンステンパルニールス

◎教育学研究科・教育学部基金

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

教育学研究科では、昨年に「教育学研究科・教育学部基金」を創設しました。ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

相川 陽子 様	鴨井 慶雄 様	西尾 新 様
浅野 佐保子 様	川部 哲也 様	西澤 園子 様
池田 実 様	郷式 徹 様	長谷川 保宏 様
伊藤 大介 様	子安 増生 様	藤田 英理 様
上杉 孝寛 様	齋藤 堯仁 様	藤田 裕之 様
大須賀 真理子 様	武居 桂 様	前田 史夫 様
葛尾 創 様	辻村 政雄 様	松井 孝雄 様
金山 靖道 様	手嶋 康 様	松本 成史 様
鎌田 龍聖 様	長沼 弘三郎 様	松本 嘉一 様

(五十音順)

平成28年5月17日現在

諸記録

科学研究費補助金(平成28年度)

事業名	研究課題名	氏名
新学術領域研究(研究領域提案型)	周産期からの身体感覚と社会的認知の発達の関連性の解明に基づく障害理解	明和 政子
新学術領域研究(研究領域提案型)	物語における時間認識の身体・神経基盤	米田 英嗣
基盤研究(A)	Understanding, measuring, and promoting crucial 21st century skills: Global communication, deep learning, and critical thinking competencies	Manalo Emmanuel
基盤研究(A)	学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究	桑原 知子
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かした教師の力量向上プログラムの開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	アジアの「体制移行国」における高等教育制度の変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)	戦後日本の指導者の「ハビトゥス」形成と「界」の構造に関する実証的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析—冷戦と植民地主義に着目して—	駒込 武
基盤研究(B)	21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発	矢野 智司
基盤研究(B)	「メディア出身議員」調査による新しいメディア政治史の構想	佐藤 卓己
基盤研究(B)	東アジアにおける教育過剰と就業行動・意識との関係に関する比較研究	岩井 八郎
基盤研究(B)	なつかしさ感情の機能と個人差: 認知・神経基盤の解明と応用	楠見 孝
基盤研究(B)	女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発—キャリアヒストリー法の構築と活用	渡邊 洋子
基盤研究(C)	<レジリエントな個>の育成とアメリカ実践哲学: 哲学と教育のクロスカレント研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	教師の熟達とキャリア形成に関する日独比較研究 —教師力としての教育的タクトを軸に	鈴木 晶子
基盤研究(C)	ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明-女性宗教者への聞き取り調査を中心に	西平 直
基盤研究(C)	学習アーキテクチャとしての「記憶空間」の形成原理および問題改善の研究	山名 淳
基盤研究(C)	トランスナショナル高等教育と多国籍大学の展開に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)	共感の個人差を形成する文化・心理・生物学的要因に関する認知科学的研究	野村 理朗
基盤研究(C)	公立図書館という空間に関する歴史横断的研究	川崎 良孝
基盤研究(C)	音韻的作動記憶における系列情報保持を支える時間構造の長期知識	齊藤 智
基盤研究(C)	アクティブ・ラーニングを生かしたカリキュラムと評価方法の開発	田中 耕治
基盤研究(C)	資質・能力を育てる授業デザインと教師の力量形成に関する開発研究	石井 英真
挑戦的萌芽研究	自閉症スペクトラム障害をもつ青年および児童に対する日常生活スキル支援の研究	米田 英嗣
挑戦的萌芽研究	専門職教育者のIPE(異業種連携教育)基盤型研修プログラムの実践開発研究	渡邊 洋子
挑戦的萌芽研究	「夢の構造分析」に関する発達の・比較文化的・心理臨床的研究	田中 康裕
挑戦的萌芽研究	学校改善に向けた「往還型」質的測定手法の開発的研究	服部 憲児
挑戦的萌芽研究	文化装置としての「師弟関係」に関する歴史社会学的研究	稲垣 恭子
挑戦的萌芽研究	誤報記事と新聞批判のメディア史的研究	佐藤 卓己
挑戦的萌芽研究	評定尺度法に対する回答の個人差と集団差を同時補正するための新たな方法の開発と評価	高橋 雄介
若手研究(A)	遺伝子多型と社会環境の相互作用が子どもの実行機能の発達とその脳内機構に及ぼす影響	森口 佑介
若手研究(B)	ナショナリズムと「文明的」自己像形成をめぐる現象の比較・歴史社会学的考察	竹内 里欧
若手研究(B)	小学校外国語活動において言語への関心を高めるための多言語カードの開発と効果の検証	黒田 真由美
若手研究(B)	物体操作を介した心的状態の推定	橋本 敦史
研究活動スタート支援	ワーキングメモリにおける手続き的表象の制御メカニズムに関する実験心理学的研究	佐伯 恵里奈
研究活動スタート支援	高等教育における改革の普及・拡大の促進 —緩衝組織の形成と大学の質の担保—	柴 恭史

厚生労働科学研究費補助金(平成28年度)

研究課題名	氏名
HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究	大山 泰宏

人事異動(H27.11.30-H28.06.01)

平成27年11月30日付け

派遣職員(臨床教育学) 退職

平成28年1月1日付け

派遣職員(総務掛) 採用

派遣職員(臨床教育学) 採用

平成28年2月8日付け

派遣職員(教育方法学) 採用

平成28年2月29日付け

石橋 遼 研究員(教育認知心理学) 退職

平成28年3月1日付け

VAN STEENPAAL Niels

特定准教授(教育学) 採用

平成28年3月31日付け

子安 増生 教授(教育認知心理学) 定年退職

松木 邦裕 教授(臨床心理実践学) 定年退職

李 芝映 助教(教育学) 退職

ユ リラ 助教(教育方法学) 退職

佐伯恵里奈 助教(教育認知心理学) 退職

鹿子木康弘 特定助教(教育方法学) 退職

江上 直樹 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) 退職

田村 徳子 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) 退職

高橋紗也子 特定研究員(心理臨床学) 退職

田中 孝二 事務長 定年退職

小山内秀和 研究員(教育認知心理学) 退職

唐牛 祐輔 研究員(教育認知心理学) 退職

小林 慧 研究員(教育方法学) 退職

毛利 恵子 研究員(教育方法学) 退職

派遣職員(教育認知心理学) 任期満了

派遣職員(臨床教育学) 任期満了

派遣職員(図書掛) 任期満了

平成28年4月1日付け

高見 茂 教授 研究科長・学部長(任期28.4.1-29.3.31)

稲垣 恭子 教授 副研究科長(任期28.4.1-29.3.31)

楠見 孝 教授 副研究科長(任期28.4.1-29.3.31)

鈴木 晶子 教授 現代教育基礎学系長(任期28.4.1-28.9.30)

皆藤 章 教授 教育心理学系長(任期28.4.1-29.3.31)

佐藤 卓己 教授 相関教育システム論系長(任期28.4.1-29.3.31)

明和 政子 教授 国際高等教育院へ配置換
(大学院教育学研究科併任)

齊藤 智 教授 国際高等教育院より配置換

齊藤 智 准教授(教育認知心理学)教授 昇任

JEREMY RAPPLEYE

准教授(臨床教育学) 採用

VAN STEENPAAL Niels

准教授(教育学) 採用

森口 佑介 准教授(教育方法学) 採用

福井 佑介 講師(生涯教育学) 昇任

柴 恭史 特定講師 昇任

田中友香里 助教(教育方法学) 採用

渡辺 雅幸 助教(国際関連) 採用

今福 理博 特定助教(教育方法学) 採用

中島 悠介 特定助教(学際融合教育研究推進センター
地域連携教育研究推進ユニット) 採用

皆本 麻実 特定研究員(心理臨床学) 採用

ZHU Ling 外国人共同研究者 受入

荻原 祐二 研究員(教育認知心理学) 採用

佐伯恵里奈 研究員・教務補佐員(教育認知心理学) 採用

YU Lira 技術補佐員(教育方法学) 採用

熊木 悠人 技術補佐員(教育方法学) 採用

梅原 志保 技術補佐員(教育方法学) 採用

眞継 芳春 事務長 吉田南構内共通事務部総務課長より配置換

中尾 知里 掛長(教職教務掛) 地球環境学堂教務掛長へ配置換

荒木 茂 掛長(教職教務掛) 工学研究科教務課専門職員より配置換

派遣職員(総務掛) 採用

派遣職員(図書掛) 採用

派遣職員(臨床教育学) 採用

派遣職員(教育認知心理学) 採用

平成28年4月29日付け

IVESON, Matthew Henry

外国人共同研究者(外国人特別研究員) 終了

平成28年4月15日付け

事務補佐員(教育実践コラボレーション・センター関連) 退職

平成28年4月16日付け

派遣職員(教育実践コラボレーション・センター関連) 採用

平成28年5月16日付け

日吉 和子 特定助教(教育方法学) 採用

平成28年5月31日付け

特定業務職員(総務掛) 退職

派遣職員(総務掛) 任期満了

平成28年6月1日付け

派遣職員(総務掛) 採用

新任教員・事務職員紹介



VAN STEENPAAL, Niels
准教授

道徳とは何か、それが文化とどう関係して形成されるのかを、日本近世史をフィールドに研究しています。よろしくお願いします。

所 属 教育学講座
専 門 近世教育・思想史



森口 佑介
准教授

京都という街がそうであるように、伝統を重んじつつ、新しいものを取り入れた教育研究を行っていきたいと考えています。

所 属 教育方法学講座
専 門 発達認知科学、発達心理学



眞継 芳春
事務長

4月から本研究科で勤務させていただくことになりました。前回は法人化前後に勤務させていただき、2度目となり、懐かしい感じがございます。とにかく"前向き"の気持ちです。よろしくお願いいたします。

荒木 茂 掛長 **所属掛** 教職教務掛

4月から教職教務掛でお世話になっております。不慣れなことばかりでご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いいたします。



渡辺 雅幸
助教

長い間学生としてお世話になりました教育学研究科のために少しでもお役に立てればと考えております。よろしくお願いいたします。

所 属 教育学研究科(国際関連)
専 門 比較教育学



田中 友香理
助教

4月に着任いたしました。ヒトの発達について、教え・学びながら研究推進に貢献したいと思います。よろしくお願いいたします。

所 属 教育方法学講座
専 門 発達科学、発達心理学



今福 理博
特定助教

乳幼児期の言語獲得、社会的認知の発達を専門に研究を行っています。研究、教育に精進いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

所 属 教育方法学講座
専 門 発達科学、発達心理学



日吉 和子
特定助教

5月から着任いたしました。恵まれた環境で研究させていただけることに、心から感謝しております。発達に関する研究を行うことで社会貢献ができるよう、全力で頑張ります。

所 属 教育方法学講座
専 門 認知科学、神経科学

派遣職員 **所属掛** 総務掛

1月から総務掛でお世話になっております。皆様のお役に立てよう頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

派遣職員 **所属掛** 総務掛

4月から総務掛でお世話になっております。真面目だけが取り柄ですが、一生懸命がんばりますので、宜しくお願いいたします。関西のノリツッコミを勉強中です。

派遣職員 **所属掛** 総務掛

6月から総務掛でお世話になります。早く慣れて皆様が気持ちよく働けるように頑張ります。よろしくお願いいたします。

派遣職員 **所属掛** 図書掛

4月から図書掛でお世話になっております。気軽に声をかけていただける雰囲気づくりを行い、お役に立てよう努めますので、よろしくお願いいたします。

訃報



森口兼二(京都大学名誉教授)

森口兼二先生は、平成27年10月23日逝去された。享年92歳。昭和22年9月京大法学部卒、人文科学研究所助手、教育学部助教授を経て昭和47年教授。昭和61年退官、名誉教授の称号を授与された。永年にわたって、社会教育学、同和教育、比較成人教育、教育社会学等の教育研究に努め、学生への教育指導にあたりこれらの専門分野において数々の業績をあげるとともに、その発展に貢献された。



宮谷 浩(京都大学教育学部 元事務長)

宮谷氏は、平成28年3月1日逝去された。享年73歳。平成13年4月から平成15年3月まで教育学部事務長として在任、文部科学省の事業「21世紀COEプログラム」への複数部局の共同申請・採択に尽力され、その成果は、後継プログラム「グローバルCOEプログラム」への代表部局としての申請獲得に繋がった。また、教育環境整備にも尽力し、学内経費の獲得に奔走し、障害者対応の身障者用エレベータの設置や教室狭隘問題の解消のため教室スペース確保など教育環境の充実にも大きく貢献された。

編集後記



私が住む地域の近くに、約300本の桜並木で彩られる閑静な住宅街があります。この一帯は、昭和初期、田園都市論にもとづいて開発されたのだとか。道は狭く、信号はなし。自動車は注意深く、ゆっくり走らざるをえません。人間が自ずと中心になる空間構成。桜花満開の後には、葉桜が春の陽光に輝きます。少し遠回りになるけれど、一年間のリズムをやさしく刻むこの並木道を通勤路としています。＜文化＞の意味が身体に染み入ります。第32号をここにお届けいたします。(JY)



京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長 岡野 憲一郎 教授 (臨床教育実践研究センター)
委員 高見 茂 教授 (教育学研究科長・教育学部長)
委員 山名 淳 准教授 (教育学講座)
委員 服部 憲児 准教授 (比較教育政策学講座)
委員 眞継 芳春 事務長
委員 古屋 比奈 総務掛長
委員 辻 幸代 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>